

---

# ポケモン達と異世界トリップ！

内藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモン達と異世界トリップ！

### 【Nコード】

N0128Y

### 【作者名】

内藤

### 【あらすじ】

主人公：城田黒子は、気付けば雪深い森の中に居た。格好はポケモンBWの女主人公、腰にはモンスターボールが6個。でもここがポケモン世界だとは思えない。しかしそんなことはどうでもいい、何せポケモンと直に触れ合えるのだからっ！！

（王道の異世界トリップがポケモンと一緒にだったらどうなるだろう、という疑問から勢いで始めました。魔法の存在する中世風世界や主人公最強が好きなので、その内出てくると思います。R15は保険です。10/31微妙にタイトル変えました）

## 登場人物？紹介（ 4話時点）

〈登場人物

主人公：城田黒子（プレイヤー名：ブラック）

微廃人。都内の大学2年生

やったことのあるポケモンソフトは黄・銀・紅・炎赤・ダイヤ・

H G S S ・黒

〈現在の手持ち

ウルガモス Lv・87

タイプ：むし・ほのお

特性：ほのおのからだ（触れた相手を火傷させることがある）  
おっとりした性格。打たれ強い。古代の城でゲット

バンギラス Lv・55

タイプ：いわ・あく

特性：すなおこし（戦闘で砂嵐を永続発生させる）  
わんぱくな性格。イタズラが好き。タマゴを孵した。

ドリュウズ Lv・50

タイプ：じめん・はがね

特性：すなかき（砂嵐状態のとき素早さが2倍になる）  
ようきな性格。物音に敏感。タマゴを孵した。

ランクルス Lv・50

タイプ：エスパー

特性：マジックガード（攻撃以外ではダメージを受けない）  
ひかえめな性格。昼寝をよくする。タマゴを孵した。

ラプラス Lv.100

タイプ：みず・こおり

特性：ちよすい（水技を受けると回復し、無効化する）  
ずぶとい性格。のんびりするのが好き。カントー地方からやってきた。

シャンデラ Lv.50

タイプ：ゴースト・ほのお

特性：もらいび（炎技を受けると炎技を無効化し、火力が上がる）

おくびょうな性格。物音に敏感。タマゴを孵した。

ボックス内待機中

ガブリアス Lv.50

タイプ：ドラゴン・じめん

特性：すながくれ（砂嵐状態のとき回避率が上がる）  
ようきな性格。昼寝をよくする。タマゴを孵した。

ナットレイ Lv.50

タイプ：くさ・はがね

特性：てつのトゲ（触れた相手を傷つける）  
ゆうかなな性格。イタズラが好き。タマゴを孵した。

「タマゴを孵した」のは全員サブウェイ攻略用のポケモン  
（厳選&努力値振っての育成済み）

登場人物？紹介（ 4話時点）（後書き）

随時加筆します

〈現状把握・1（前書き）〉

初めて小説らしきものを書きました。よろしくお願いします。

## 〈現状把握・1〉

黒子がハッと気付けば、そこは一面に雪が積もった森の中だった。

(雪!?)

今は10月、ショッピングモールではハロウィン商戦真っ最中の秋だったはずだ。

「っていつか、どっ、っ」……」

呆然としてゆっくりと首を巡らせれば、よく晴れた青空と日光を照り返してキラキラ光る白い雪、葉を落とした木々の黒い幹で構成された風景が見渡す限り続いている。

季節がおかしいのは一旦置いておいて、黒子の住居は都内だ。上京してきたのでそんなに土地勘が有るとは言えないが、それでも数年を過ごした。その黒子の生活圏内に、こんな場所は無い。だいたいいくら外れの方とはいえ23区内に、こんなに土地が余っているはずがない。

確か夕食を食べた後、暇つぶしとして久しぶりにDSを起動し、ポケモンブラックでバトルサブウェイに挑戦していた。珍しく7週目まで進められて、サブウェイマスターに会う為に気合を入れなおした矢先にエリートトレーナーに撃沈し、レポートを書いている途中スリープ状態にしたでDSを閉じた。

それから……それから？気付いたら見知らぬ森の中で、しかも季節がおかしい。

思い出せる限りで状況を振り返って改めて呆然としなおし、黒子

はへタリと雪の上に座り込んだ。腰のあたりでカチャカチャと何かが触れ合う音がした。

ゆるゆると視線を下げると、自分の服装が目に入る。

白いシャツに黒いベスト、ショルダーバッグを下げて、短パンの下はそれなりに履きなれていそうなブーツ。俯いた顔の横で、ポニーテイルにまとめられた髪がパサリと揺れる。

(……ポニーテイル?)

黒子は我に返って慌てて全身をチェックする。

今まで意識していなかったが、野球帽のような鰐つばが前についた帽子をかぶっていた。

髪は結構上の方でまとめてあり、それでも毛先は首の後ろあたりにある。確かに前はこのくらいあったが、自分は先週髪をバツサリ切った。今は肩につくくらい、かろうじて下の位置ではまとめられなくてもポニーテイルは出来ない長さにしたはずなのに。

帽子をとる。全体的に白く、正面の眼のような丸いモチーフと鰐つばが濃いめのピンクだった。

白いシャツに黒いベスト、短パンにブーツ。どれも自分では絶対に持ってない自信が有るが、微妙に見覚えがある。なんだか嫌な予感がしてきたが、黒子はそれを無理矢理頭の片隅に追いやって、ショルダーバッグを開けた。

目の前に半透明のウィンドウが現れる。上半分には道具の全体映像と短い説明、下半分には道具の一覧がズラツと、黒子の視線に反応してカーソルがどんどん下へ下へと流れていく。一覧の中のどの道具も、黒子には馴染みのあるものだった。視線を横へずらせば、タブが回復・わざマシン・きのみ・大切なものときてまた道具の一覧へと戻る。一旦目を閉じた。再度目を開けば、ウィンドウは変わ

らず眼前に展開されている。ちょっと考えて、シヨルダーバッグを閉じた。ウィンドウが消滅して、視界がクリアになる。

黒子は油が切れたロボットのようなきこちない動きで、腰の後ろへ手をやった。テニスボールくらいの大きさの球がいくつか、ベルトに固定されている。適当に一つ外して、恐る恐る目の前に持つてくる。

全体的に半透明だが上半分が赤、下半分が白に色分けされたその球の中には、鋭い目つきでキョロキョロと辺りをうかがっている様子の生物がいた。黒子が自分を見ていることに気がついたのか、微妙に首をかしげてキョトンとこちらを見返してきたのは、世界的に有名な架空の生物 “ポケモン” の1匹・バンギラスに見える。

彼を“バンギラス”と認識した瞬間、またもや黒子の目の前に半透明のウィンドウが展開された。

わんぱくな 性格。

育て屋夫婦から

もらった タマゴが

スカイアローブリッジで

かえって 出会った。

イタズラが 好き。

・名前 バンギラス Lv.55

・タイプ いわ あく

・親 ブラック

・もちもの オボンの実

・現在の経験値 208801

・次のレベルまであと 10719

バンギラスから視線を外すと、ウィンドウはあっけなく消滅する。

残りのボールも全て外して目の前に持つてくると、どのボールも上下紅白・半透明で、中にいるものは黒子を見て、それぞれ不思議そうだったり嬉しそうだったり眠そうだったり（というか寝ている）といった様々な反応を見せた。

ウルガモス、ガブリアス、ナツトレイ、ドリユウズ、ランクルス。ウルガモス以外はみんな、バンギラスをエースとした、ついさっきまで挑戦していたバトルサブウェイのシングル攻略用の砂砂風パーティーパのメンバーだ。そしてゲームやアニメやマンガのキャラとして架空にしか存在しないはずの生物 “ポケモン” である。

黒子はそれを確認して、改めて1匹1匹と目を合わせた後、6個のボールを宙に放った。

〈現状把握・1（後書き）〉

主人公の名前はソフト名（ブラックノホワイト）からとりました。  
ポケモンはニックネーム無しで行こうと思います。

ポンツという軽い音が連続して辺りに響き渡る。

音が止んだとき、黒子の前には先ほど確認したポケモン達が並んでいた。

(ホントに出てきた……)

ボールから出すためにゲームで見えていた通りに放ってみたのだが、どうやら正解だったようだ。

ポケモンを生で見たい！というささやかな夢が叶って、黒子はうっとり目の前の6匹を眺める。

しばらくそのまま放心状態でいた黒子に、ガブリアスがのそのそと近寄ってきた。背を丸くして、雪の上に置いたボールを転がしている。手では持てないらしい。

(何そのかわいい仕草！ガブリアスってかっこいい系だと思ってたのに！良い意味で裏切られた……っていうかかわいいー！！)

近寄ってくるガブリアスを見て、黒子の脳内は大変なことになっている。

が、ガブリアスはそんな黒子の傍まで来ると、ボールを差し出して黒子に何か言いたそうな目を向けた。黒子は首をかしげる。猫背気味でも、ガブリアスは155cmの黒子よりだいぶ大きい。見下ろしてくるガブリアスは何も言わないが、何やら必死な雰囲気だけは伝わる。

「えっと、どうしたの？ガブリアス？」

とりあえず声を掛けてみたが、ガブリアスの様子は変わらず、黒子にボールを差し出して何か言いたげな目を向けるだけだ。

途方に暮れた2人(?)の様子を見てとったのか、黒子の肩にポーンと緑のゼリーが乗せられた。ランクルスが、ふよふよと浮きながら今度はガブリアスの肩にもう片方の手を乗せる。

突然、黒子はものすごい寒さを体感した。積もった雪に触れた足は凍りつきそうで、冷えた空気は容赦なく肌をさしてくる。歯の根も合わないほど震えて、なんだか眠くなってきたかもしれない……と思った途端、寒さが襲った時と同様の唐突さで、寒気はおさまった。

ランクルスが心配そうな目でこちらを見つめている。黒子とガブリアスの肩に置かれていた手は、もう離れていた。黒子はハツとして、急いで目の前に置かれたボールを手に取り、ガブリアスの声をかけた。

「戻って、ガブリアス！」

ボールがパカッと開かれ、ガブリアスが戻ると閉じた。中を確認すると、ガブリアスはホツとした様子でいそいそと横になっていた。さつき出てくる前も寝ていたようだったから、これからまた眠るのだろう。ステータス画面のウィンドウが出てきたのでチェックすると、HPが4分の1ほど減っていた。申し訳なくて、黒子はボールの中のガブリアスに謝る。

「ごめん、こおりタイプ苦手なんだから寒さも苦手だよ。これからは気をつけます……」

落ち込んだ様子の黒子に、ガブリアスは気にすんなというようにボールの中から手を振る。

ガブリアスが目を閉じたのを確認して、出来るだけ揺らさないよ

うにボールをベルトに固定しなすと、黒子は立ち上がった先ほどから傍にいたランクルスに向き合った。

「ありがとう、ランクルス。ランクルスが教えてくれなかったら、ガブリアスが瀕死になるところだった」

ランクルスは浮いていた高度を若干上げて黒子と視線を合わせると、微笑んで左肩をポンポンと叩き、右手を差し出す。黒子は感激してランクルスの右手を両手で握りこんだ。初めて触ったランクルスのゼリー状の皮膚（？）は、ひんやりした不思議な感触をしていた。

黒子は改めて、他のポケモン達に視線をやる。

バンギラスは座り込んで雪をこねくり回して遊んでいた。ウルガモスはその上に張り出した木の枝に止まっている。ナットレイとドリユズはウルガモスを目いっぱい警戒しつつ、精一杯離れた場所で2匹で雪合戦をしていた。

（ああなんて天国っ……！ドリユズって意外に小さかったのね。2匹がウルガモスから離れてるのは“ほのおのからだ”のせい？…バンギラスの“すなおこし”はどうなってるんだろ？一面雪で砂が無いから未発動とか？……雪？）

「そういえば、ガブリアスはあれだけ寒がってたのに、全然寒くない」

よく考えなくても、黒子の現在の服装は半袖シャツにベスト・短パンにブーツという、ポケモンBWの女主人公の格好だった。髪が伸びているところからして、容姿も本来の自分とは異なっているだろう。主人公は砂漠だろうが雪原だろうが格好を変えずに踏破して

いたが、ゲームの仕様だと思っていた。もしかしたら、変えなくても済むように防寒などの効果が施されていたのかもしれない。

黒子はここにきてやっと現状を把握する気になった。今まではあまりに突飛な環境に、自分でも知らず知らず逃避していたらしい。生で見るポケモンのリアリティがあまりにも素晴らしかったというものもある。

とりあえず残りのポケモン達は放っておいても大丈夫そうなので、ショルダーバッグを開けた。ウィンドウが展開され、“大切なもの”にカーソルを合わせてタウンマップを取り出す。広げてみて、半ば予想していたこととはいえ、真っ白なタウンマップに気が滅入った。

見渡す限りの雪と葉を落とした木々からここが冬なのは分かるが、例えゲームの中だとしてもこの場所に見覚えは無かった。“森の中”といえば“ヤグルマの森”だが、あそこは冬でも鬱蒼とした森だ。ということは、自分が主人公の格好をしてポケモン達が実在しているにもかかわらず、ここはゲームの中ではない。

(とりあえず、人に会わないと。ここがどこだか把握する手段が私には無いんだから、誰か人を探す、というのを当面の目標にしよう)

## 2 (後書き)

タウンマップ：B4くらいの白い紙  
すごいつりざお：モンスターボールとか付いてない普通の釣り竿っ  
ぽいもの  
とします。

「人に会う」という当面の目標を決めた黒子は1人頷き、タウンマップをバッグに仕舞おうとして、違和感を覚えた。“大切なもの”タブの一覧を上から下まで見直して、また一番上に戻る。違和感が消えないので、もう一度上から眺めた。

（ポケモンずかん、が大切なもの扱いで入ってるのは良いとして、すごいつりざお・ダウジングマシン・タウンマップ・じてんしゃ…  
…タウンマップ？）

右手を見れば、確かに白紙のタウンマップを持っている。“大切なもの”に入っているのは1個しか存在しない道具だから、取り出せば一覧から消えると思ったのだが違うのだろうか。試しに手にタウンマップを持ったまま、もう1回タウンマップを取り出してみた。両手に白紙のタウンマップ。“大切なもの”一覧にはまだ「タウンマップ」の欄が表示されている。もう1回やってみる。白紙のタウンマップが増えた。

しばらく試して分かったのは、元からバッグに入っていたすべての道具に個数表記が無く、恐らく無限に取り出せること。いいキズぐすりやおおきなキノコなど、ゲーム世界には存在していたがバッグに入っていないなかったものは無いこと。“元からバッグに入っていた”と限定したのは、新たに雪玉を作って入れてみると“道具”一覧に「ゆきだま×1」という欄が出て、雪玉を取り出せば欄が無くなったことから、この世界で新しく入れたものは入れただけしか取り出せないのだろうと思われたためだ。

(RPGでお馴染みの、どんだけ入っても見た目も重さも変わらない四次元バッグか。ほんと見た目フツアのバッグなのに。生もの入れても腐らなかつたりするのかなあ)

面白がって取り出しすぎた大量の白紙タフマン紙やきのみ類をすべて仕舞いこみ、寒さのせいで減ったと思われるガブリアスのHPを回復させようとモーモーミルクを取り出したところで、ハタと気付く。ガブリアスのあの寒がりようから、この環境下でまたボールから出すのは論外だ。ゲームではボールの外からでも回復薬を与えることは出来たが、具体的にはどうやっていたのだろうか。

考えても分からなかったのでひとまずガブリアスの回復は先送りにし、先ほどから傍らにいるランクルス以外のポケモン達に声をかけた。HPゲージも減ってはいたが黄色にはなっていなかったし、まあ大丈夫だろう。

「ウルガモス、バンギラス、ドリユウズ、ナットレイ！ちょっとこっちおいで！」

言うことを聞いてくれなかったらどうしようという懸念が一瞬頭をよぎったが、杞憂だった。

まずヒラヒラとウルガモスが飛んでくる。その後にバンギラスとバンギラスの後ろに隠れるようにドリユウズが、ナットレイはドリユウズに蔓を巻きつけてひきずられてやってきた。ウルガモスも自分の特性を分かっているのか、バンギラスとランクルスを挟んだ、はがねタイプの2匹からは一番遠い枝にとまる。枝に積もっていた雪が熱で溶けて、ドサドサと下へ落ちた。

(ほうほう、やっぱ“ほのおのからだ”だけあってウルガモスは熱いのね。でもゲーム中だとウルガモスで空飛んでただから、主

人公とかトレーナーは触れるはず！)

あとで落ち着いたら絶対にモフモフしよう！と心に決めて、黒子はポケモン達へ問いかけた。

「念のために聞いておくけど、みんなここがどこだか知ってる？」

一斉に首を振られる。

「おっけー分かった。じゃあちよつと移動しようと思うから、ボールに戻ってもらいたいんだけど……みんな自分のボールって、持ってる？」

さつき冷静になって初めて気付いたのだが、黒子の手元にはモンスターボールがガブリアスのもの1個しか無かった。そのガブリアスのものも、彼が自分で黒子に渡したものだ。黒子はポケモン達を出すためにボールを宙に放ったが、その後ボールがどうなったか記憶に無かった。

確かアニメでは、投げた後は勝手にトレーナーへ戻ってきてたような覚えがある。ゲームではそもそも描写が無かった。しかしガブリアスを戻す際は声をかけるだけで済んだのだから、この世界では出す際も声をかけるだけで良かった可能性が高い。いくら混乱していて、生きて動いている生のポケモンが見たかったとはいえ、後先考えず放り投げるなんてことをしたのはなかなか気まずかった。

そんな黒子の葛藤をよそに、ポケモン達はそれぞれすんなりボールを差し出してくれた。どことなく呆れた視線が混ざっていた気がするの断じて気のせいだ。

「ありがとう。よし、戻れ、ナットレイ、ドリュウズ、バンギラ

ス、ランクルス、ウルガモス」

順にボールが開閉してみんなが無事に戻ったのを確認し、念のためウインドウを表示させてステータス画面をチェックする。能力も見直しておこうとして、画面にもう1つタブが有ることに気がついた。見慣れないタブへ移動してみると、パソコンの預かりボックスだった。どうやらこの世界では、ポケモンを入れ替えたいときはボールに入れた状態で（ここはゲーム通りだが）、1匹ずつウインドウを展開して入れ替えるようだ。

一旦ボックスに入れればHPなどは回復するはずなので、黒子はガブリアスを入れ替えておくことにした。

「これだけ周りが雪だらけなんだから、こおりタイプがいた方が良いだろうし。ガブリアス、ゆっくり休んでねー」

実際に休めるかどうかの確信は持てなかったが、いくらボールの中とはいえいるだけでHPが減るような苦手な環境下よりはマシだろうと思っ、入れ替えを実行する。

黒子がガブリアスと入れ替えたのは、ファイアレッドから連れてきていたラプラス。もう育てきっていたので、連れてきた後はパーティに加えたことは無いが、一応バッジは全部集めてあるんだから言うことは聞いてくれるはず……バッジ？

慌ててバッグを開けて“大切なもの”タブを展開する。タウンマップの違和感のときにちらっと視界を流れていったのは見間違いは無かった。トレーナーカードとバッジケースを取り出して、所持金とバッジを確認する。所持金は40万弱だったが出てきたのは日本円の紙幣だったので、使える望みは薄そうだ。バッジはきちんとすべて揃っていた。

「よしよし、たぶん大丈夫つと……ラプラス！出ておいでー」

ポンスと軽い音とともにボールが開き、ラプラスが出てきた。やはりポケモンを出すときは、声をかけるだけで事足りるようだ。こちらをじつと見つめる彼女を見上げて、目を合わせる。

「私的には初めましてじゃ無いんだけど、ブラックでは初めまして。今、なんだかよく分からない状況になってるんだけど、これからよろしくね！」

ラプラスのステータスはゲーム通り、親はFRプレイ時の主人公：レッドとなっていた。いくらプレイしたのは自分でも、現在の姿は何故かBWの主人公：ブラックだから、ラプラスにとっては初対面だろう。

「これから移動しようとしてるの。雪の中だし、貴女の力が必要なのが有ると思う。とりあえず必要な時はまた呼ばせてもらうから、忙しなくて悪いんだけど、ボールに戻ってて」

ラプラスはぐるっと周囲を見渡して、おとなしくボールに戻ってくれた。この“なんだかよく分からない状況”下で有効かは分からないけどバツジも有るし、目を見た限りマイナス感情は持ってなかったように感じたので、たぶん大丈夫、うん。

さて。

人に会う為には、とにかく道か里に出なくてはいけない。黒子が初めて気付いたとき、頭上の高い位置にあった太陽は、今では右側の、結構低めの位置にある。冬の日没は早いから、そろそろ夕暮れ時かもしれない。人里までどのくらいの距離か分からないし、黒子は野宿の方法も知らない。ウルガモスがいるし今の服装でまったく寒さを感じないので火や暖の心配は無いが、いくら四次元バッグと

はいえ野宿に必要な道具　毛布とかナイフとか　は無い。  
食糧だって、きのみと飲み物くらいだ。人間にも効くかは置いといて、HPを回復する薬類は有るのだから、黒子は行けるところまで夜通し歩く予定を立てた。

（見通す限り森っていうのは初めての景色だけど、緩やかでも斜面だからきつと山だ。とりあえず下ってみようっと）

### 3 (後書き)

4倍弱点の環境下だと毒・火傷状態みたいに徐々にHPが減るという異世界ルール。

ガブリアスはおりが駄目だから寒いのが駄目

ナットレイはほのおが駄目だから砂漠とか熱帯雨林の“暑い”は大丈夫だけど、マグマ地帯とかの“熱い”は無理  
みず4倍だと雨のときが駄目

## く人に会う・1

すっかり日が暮れた森の中を、シャンデラを頭に乘せた黒子がオボンの実をかじりつつ歩いていた。

結局歩き始めて1時間ほどして、日は暮れてしまった。あ、なんか空の色が変わった？と思ってからはあっという間だった。やはりこの状況に気付いた最初の地点で、かなりの時間を過ごしてしまったようだ。そして黒子は当初の予定通り日が暮れてからも歩き続けようとしたのだが、夜の森は予想以上に歩きにくかった。

人は元より動物もいないのか冬眠中なのか、積もったそのまま凍りかけている雪の上は歩きにくいし、何より暗かった。ポケモン世界の主人公の身体能力のおかげか、慣れない雪道なのにほとんど疲れはないのは僥倖と言えたが、新月なのか星明かりだけが頼りな夜の暗さは、現代人な黒子には耐えられなかった。そこで手持ちのナットレイをボックスのシャンデラと交換し、お伴を頼んだのである、

「シャンデラ、貴方ゴーストなんだからさ、暗いの好きなんじゃないの？」

「……きゅい？」

「だーいじょうぶだって、何もいないから。だからもうちょっと顔上げて前照らしておくねー」

シャンデラを厳選したとき性格を臆病にしたのだが、確かに彼は臆病だった。臆病というか人見知りというか、見慣れない場所が駄

目だったらしい。ボールからは出てくれたし、思惑通りシャンデラの炎に照らされて歩きやすくなっただが、黒子の足もとで後ろに隠れつつ恐る恐るといった体で進むので、黒子の影が濃くなってしまう。その様子自体は卒倒しそうなレベルでかわいかったのだが、これではあまり意味がない。いろいろ試した結果、現在シャンデラは黒子の頭に両手(?)を回して、頭の上に顔を出している。

少し心配していたが、シャンデラの頭上と両手の炎は触れても熱くないし、帽子や髪に燃え移ることも無かった。彼の特性が“もらいび”だからなのか、ゴーストタイプだから普通の炎と違うのかは悩ましい所である。ゴーストタイプといえばシャンデラにも体重は有ったはずなのだが、まったく重さを感じなかった。たまに透けて木の枝を通り抜けているので、ゴーストタイプは気体に近い存在なのかもしれない。

あまり感じないといえそれなりには疲れるので、おいしいみずとおボンの実を飲み食いしつつ、紫の炎にぼう、と照らされた道なき道を歩いている(回復薬は人間にもちゃんと効果が有った)。はたから見ればわりとホラーな見た目だが、黒子はポケモンが連れ歩いてご満悦だった。ちなみにおいしいみずのピンは中身が無くなっても消えず、“道具”に入れると「あきビン×1」と出たので、町かどこかに出たらまとめて捨てようと思っっている。

そんなこんなで歩き始めて3時間は経つ。当初は何か動くものが見当たらないか、また歩きなれない道のりに気を張っていたのだが、緊張は長く続かない。状況に慣れ始めると、思考は勝手に逸れていく。せつかくシャンデラという聞き役もいるので、独り言として状況を整理することにした。

「こんだけ歩いても全然出られる気がしないってのは、ずいぶん

と広い森なわけだ。しかも下ってきてたはずなのにいつの間にか平らだし！日本の森ってイコール山だからもつと起伏激しいだろうし、樹海だったらきつと何のとは言わないけど痕跡が残ってるだろうし……日本じゃないよなあ。最初の地点からテキストな方向に歩いてきたけど、まさかどんどん分け入ってるのか同じところ回ってるのか、無いよね？」

誰にもなく問いかけつつ、低く張り出した枝を避けたのち藪を迂回する。

「シャンデラ、オボンの実食べる？はい、どうぞ。……ポケモンが実在してるし四次元バッグはあるし、でもこんな景色も広い森もゲーム中に無かったし、どっかファンタジー的な世界にトリップしちゃったのかなあ？まさか20歳過ぎてからこんなファンタジー体験できるとは思ってなかったけど、ポケモンが一緒なだけでもうなんてかお釣りがくるね、ほんと。トリップだか転生だか知らないけど、戻れなくなって後悔無いわあ。ポケモン達と、直に触れて話せるなんて」

ズボツと勢いよく吹きだまりに突っ込んでしまった。

「おつとつと。よっこいせ、と。主人公の服装と身体能力すごいな、現実のゆとりもやしつ子な私なら間違いなくすでに凍死している……完璧にブラッ<sup>主人公</sup>ク化してるなら、かなり超人だよー体力とか腕力とか、あと回避力とか。顔の確認してないけど、身体と髪みる限り変わってるんだらうな、みんなも私が親なこと<sup>ポケモン達</sup>に何の疑問も持たてなかったし」

落ちていた木の枝を踏むと、バキツと予想以上に大きな音を立ててしまった。シャンデラが小さくなって黒子の後ろへと隠れる。

「シャンドラー、大丈夫だよなんもないよー。ごめんね、もう何も踏まないようにするから！っていつか“ちいさくなる”覚えさせたこと無いのに何で使えるの？」

そのとき、かすかに何かが聞こえた気がした。風の音ではない。

「シャンドラー？貴方も聞こえた？」

「きゅい！」

歩き始めてから初めて聞いた、他の生き物が立てる物音だ。

「どつちからかな……」

ひたすら耳を澄ます。気配を探っても分かる範囲に変化は無く、見える範囲に灯りも無かった。息が詰まるような時間が過ぎて、黒子と同じように気配を探っていたシャンドラーが、突然右に顔を向けた。

「シャンドラー、そっち！？」

「きゅうー！」

「よしきた！」

黒子には何も聞こえなかったが、“物音に敏感”なシャンドラーがこつちだと確信した。性格は臆病でもバトルサブウェイ攻略用に育てた彼は、ゲーム内とはいえ結構な場数を踏んでいる。何かあると信じて、黒子は全力で夜の森を駆けた。



## く人に会う・1 (後書き)

うっかり半分ほど消してしまつて精神的ダメージががが。出来るだけ早めに続きを上げられるようにしたいです…。ポケモンの鳴き声はゲーム音声参考と、ノリです。

辿り着いたのは、森の終わりだった。正確には森の中のだいたい一車線幅の道の途中で、たぶん休憩スペースらしい、広場になっているところ。そこで野営中を襲われたようだった。軽トラほどの大きさの幌馬車、その前に小さく燃えている焚き火、道を挟んで反対側の森から出てくる狼だろう獣達。シベリアンハスキーより数倍は大きい体躯、真っ黒な体毛に爛々と光る赤い眼、ただの狼ではないだろう。木が無いおかげか小さな焚き火と星明かりで辺りは意外と見渡せるが、闇の塊のような狼達が何頭いるのかは分からなかった。

馬車や焚き火から離れて、2人の男が剣を振るって狼達が広場に入らないようにしている。それでも数頭は侵入を許してしまったように、馬車の近くにも木に繋がれた馬を守って槍を構え、狼と睨み合っている若い男がいた。

物騒な音が聞こえて始めてからは慎重に進んだので、黒子は誰も気づかれること無くこれらの様子を見て取れた。周囲を見渡してひとまず槍の男に加勢することにする。2頭の狼と睨み合う男の死角から、もう1頭の狼が飛びかかろうとしているのだ。躊躇っている暇は無かった。

「シャンデラ、“だいもんじ”！」

ゴオツと至近距離を灼熱の塊が通り、チリチリと肌が焼けたような気がしたが、そんなことに構ってはいられなかった。飛びかかろうとしていた狼に大の字に着弾するはずの炎の塊が、呑まれた。大きく口を開けて炎を呑んだ狼の体が一瞬一回り大きくなったと思っ

たら、より一層紅くなった双眸が黒子へ向かう。標的を変えた狼が再び口を開けた。濃密な攻撃の気配に、黒子は慌ててその場から飛びのく。シャンデラが黒子と狼の間に飛び込んで攻撃を受けた。狼から放たれた赤い熱が、シャンデラを包む。

「シャンデラ!？」

「きゆうー!」

どうやらほのおタイプの攻撃だったらしい。特性“もらいび”によって赤い熱を吸収したシャンデラは、両手(?)や頭の炎の火力が格段に上がった。しかもなんだかご満悦だ。攻撃が無効化されたことで警戒したのか、狼は追撃せずにこちらの様子を窺っている。

「馬鹿、ディアフロウ炎狼に炎攻撃するやつがあるかつ!!」

助けたはずの槍の男から怒鳴られてしまった。彼は彼で、2頭の狼と槍で交戦状態に入っている。戦ってる最中に声をかけてくれるなんて親切だなあなどと黒子は暢気に思ってしまったが、ハツと我に返って、今はバトル中!と集中する。

「あっちも“もらいび”みたいな特性を持つてると。つまりほのおタイプ。ラプラス!」

炎を呑んで返してくるなんて生き物は初めて見たし、デフォルメされたところのあるポケモンよりだいぶ実在の動物っぽいけど、きつと同じような生き物なのだろう。なら苦手なタイプの技を繰り出せば良いはず。しかしシャンデラにはほのおタイプに効果抜群な技を覚えさせていなかったため、黒子は新たなボールを取った。軽い地響きを立てて、目の前にラプラスが現れる。シャンデラにはまだ灯

り役になってもらうため、ボールには戻さず近くに引き寄せた。

「ラプラス、狼に向けて“ハイドロポンプ”！」

「ぶらああっつー！」

ラプラスは黒子の指示を忠実に実行した。ズドドドと水の奔流が黒子を狙っていた狼と、ちょうどその直線上にいた槍の男と戦っていた2頭の狼を巻き込み、道の反対側の狼達が出てきている森の奥まであっという間に流し去る。

「おー、実際に見るとすごい威力だ……。ありがとう、ラプラス」

ラプラスは一瞬黒子と目を合わせた後、ふいと顔を背けてあくびをした。微妙に眠そうな気配をまわらせている。

「あ、夜だもんね。シャンデラが元気だから忘れてたけど、ゴースト以外は眠いのか」

それならばさっさと決着をつけなくてはいけない。黒子は前方、いまだ複数の狼達と戦っている2人の方を見る。こちらには気付いてない様子、というか満身創痍でこちらまで注意を向けてられないようだ。まだ一応狼達を足止め出来ているが、それも長くはないように思えた。しかし、彼らは周りの狼達と戦っている。つまり、ほぼ囲まれている。まとめて攻撃したらず巻き込む。

「んー……シャンデラ、“サイコキネシス”であの2人同時に浮かせられる？2、3mで良いんだけど」

「きゅーー！」

任せるとばかり全体の炎を揺らめかせたシャンドラが、スイ、と両手を上げた。群れの方を見ると、突然力チンと固まった2人が何かに引つ張られたように急浮上した。狼達は突然浮いた敵を戸惑ったように見上げ、辺りを見回して新しく獲物と定めたのか、こちらに向かってくる。

「ラプラス、馬車は避けて狼達だけに“なみのり”！」

「ぶうっ、らああ！」

大量の水がどこからか現れ、大波となって向かってきた狼達をまとめて押し流す。先程の3頭と同じように、道の反対側の森まで。しかし“ハイドロポンプ”に比べたら低威力なせいか、それとも抵抗力が強い個体なのか、1頭が森の入口で踏ん張っていた。ギラギラとこちらを睨みつけている一際大きな狼。ダメージが大きくて動けないのかすぐさま向かってくる様子は無いが、眼にはさつき対峙した狼より圧倒的に強烈な殺意を浮かべている。黒子はしかし、まったく怖くなかった。ラプラスに再び指示を出す。

「ラプラス、もう一回“なみのり”、そして“れいとうビーム”！」

改めて呼び出された大量の水が、残った狼に襲いかかった。波は引かない内に“れいとうビーム”で凍っていく。波に吞まれた狼も一緒に。水がすべて凍り狼が完全に動かなくなったのを見て、黒子は用心深く氷に近付いた。近くで見ると、周りの木々と一緒に狼を閉じ込めた氷は不自然なくらい透明だった。そっと手を触れると、氷はパリーンという軽い音をたて、粉々に砕けた。凍っていた狼と木も含めて。予想外の結果に、黒子はきらきらと舞う氷のかけらを

呆然と眺めた。

## 2 (後書き)

バトル描写、のつもりです。前回消えたと嘆いていたのはこの部分です…

なかなか難しかったです、分かりにくい部分や誤字などありましたら指摘していただけると嬉しいです。

あんまり“人に会”ってませんが、次回はちゃんと会話します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0128y/>

---

ポケモン達と異世界トリップ！

2011年11月10日07時13分発行